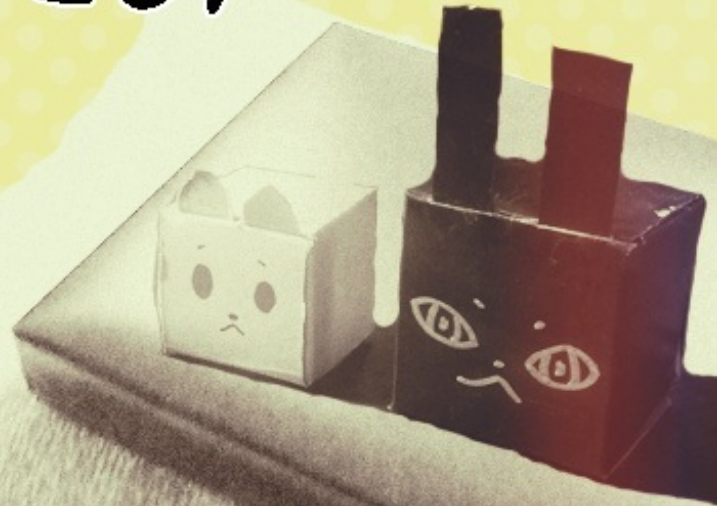


# こたついぬず まとめ



★こたつ ワンダラー

★こいぬせんず

うたいぬ・ゆね

# - その 1. -



- ふりーだむ&謎めく黒犬・犬先生
- きまじめ&まろやか白犬・ラクシャさん

いつか どこかの こたつのそばで、  
2匹が キミヨウなお話をしています…

かれらのおはなし、どんなかな？



犬先生「みなさん、どうも犬先生だよ。

そして見てくれ、埋蔵遺跡お小遣いでこんなものを買ったんだ。  
どんな技をするか楽しみで仕方がないねえ、ラクシャ君」



ラクシャさん「みなさん？

...それはともかく、これはサーカスのテントじゃないよきっと。  
(コレはまたミョウな休暇になりそうだ...)」





犬先生：“炬燵”の内部は、失われし民の秘密の楽園なのだ。

思い切りバッサバッサズズーカーツに浸ってみたくはないかね、助手よ？



ラクシャさん：えーっと あるいみ当たってるかなあ...

なにか、あった

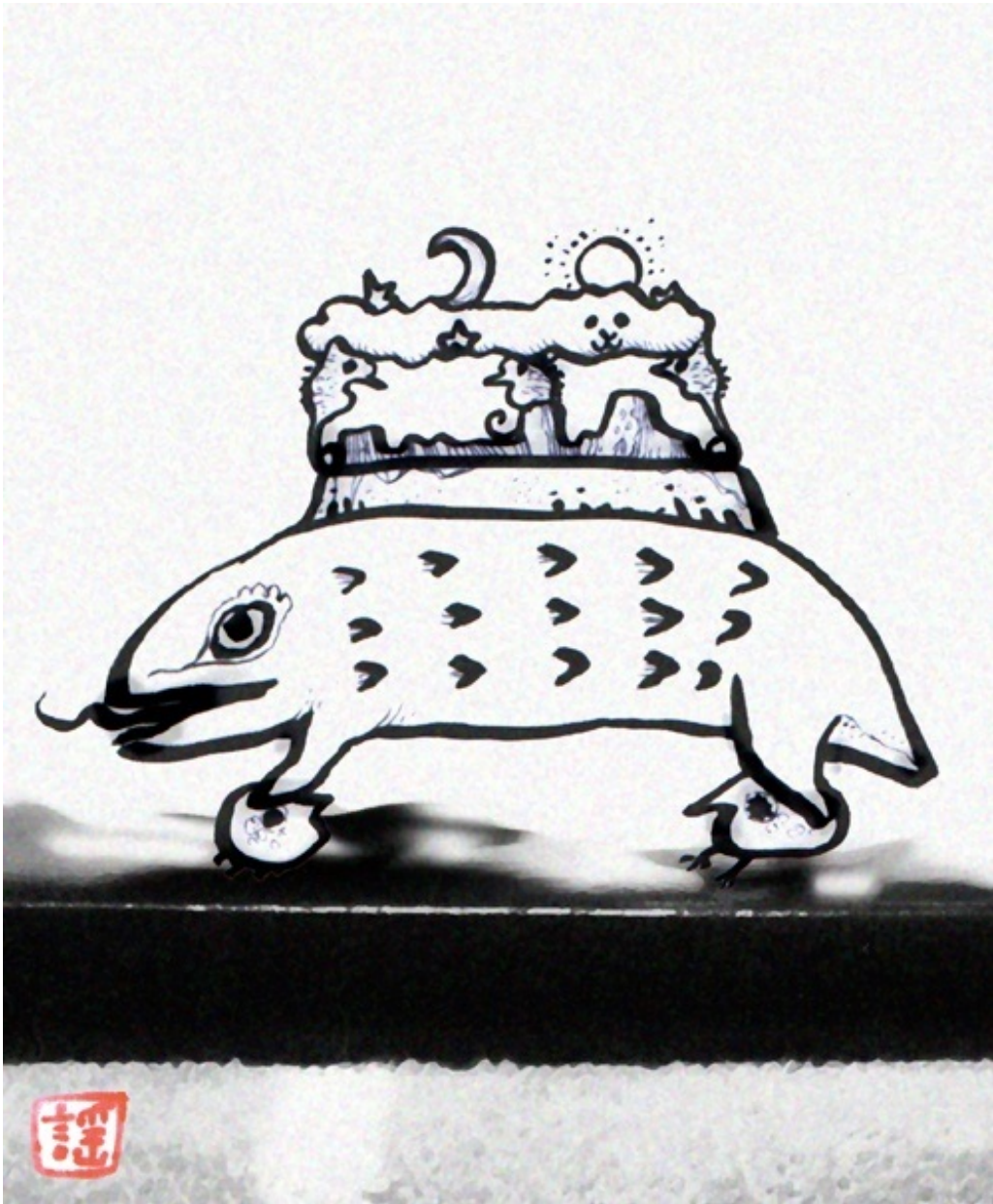
---



ラクシャさん：このふしぎな机にあいそうな形だけど、なんだろう。



犬先生：あ、あれミカンじゃない？



犬先生：世界はこうして出来たとしたらば、浪漫ティックだと思わんかい？



ラクシャさん：支えるコタツでっかいなあ！





犬先生「この姿勢はそうだなあ、例えば私がアステロイドベルトだとすると...」



ラクシャさん「.....戻すの、手伝おうか？」



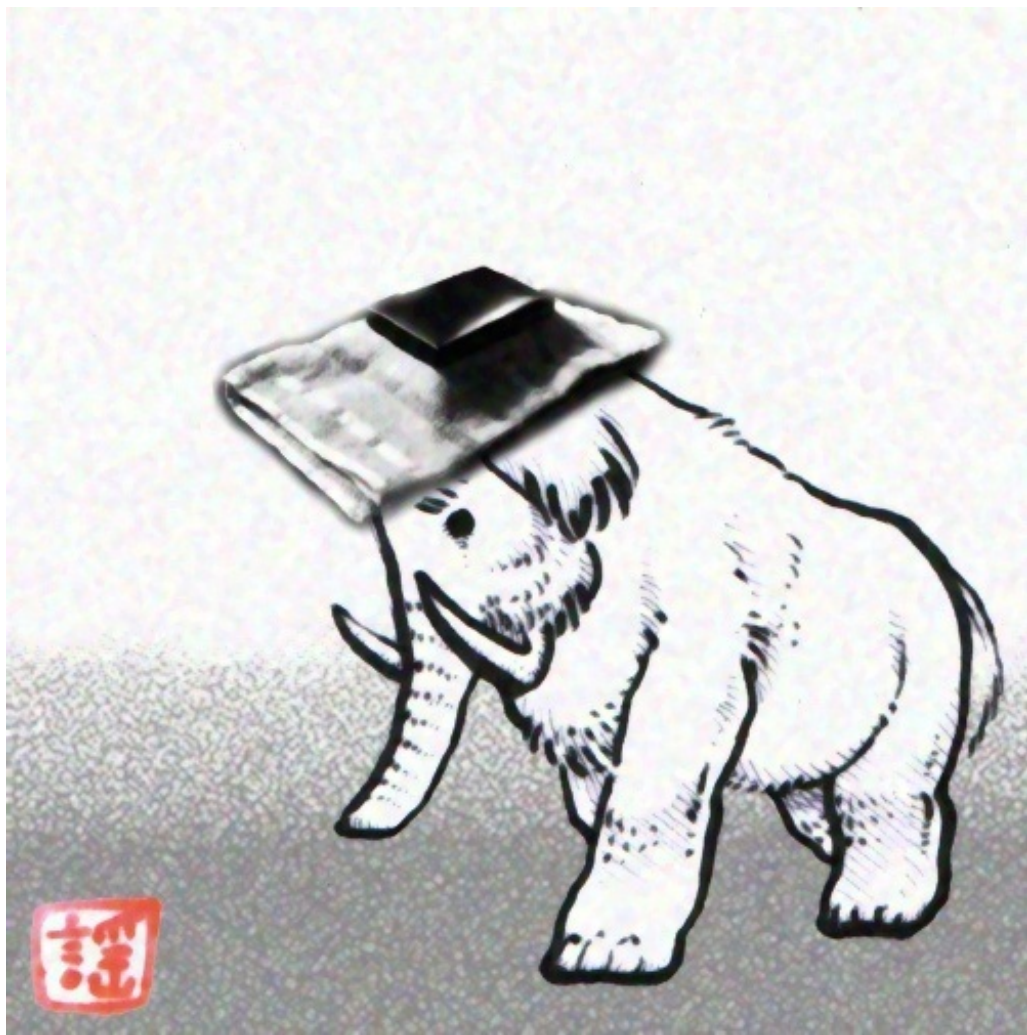
ラクシャさん「奇妙のごんげ・犬先生が従来の内部を変えました。」



犬先生「以前私がアドリア海辺りのこたつに潜ったときに思ったのです。」

そうか、蟹であり、またシャコなのだと  
そんな一品」





犬先生「コタツゾウって、氷河期のどのくらいの生物だったっけか？」



ラクシャさん「そんな切ない象さん、いたっけ？」



ラクシャさん「あれ、コレ大事なんじゃ...？」



犬先生「あらいやだ！」



ラクシャさん「そういえば、この部屋どうなってるのかなあ

あ、蜜柑あるよ」



犬先生「うむ。軽く押して1番やわらかいのを頼む。」





犬先生「ラクシャ、さきに寝ちゃったよ。」



ラクシャさん「んん〜...あ、はい申し訳ありません

いえ...部下でなく私のせきにゆんデス.....ぐふう」



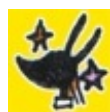
ラクシャさん「悪い、コレだけ調べちゃうからね...」



犬先生「キミはメモは光で書かんのだなあ。じゃあ私は”楽しい悪夢ショー”でも...

あっ見てみよこれ良いぞっ」



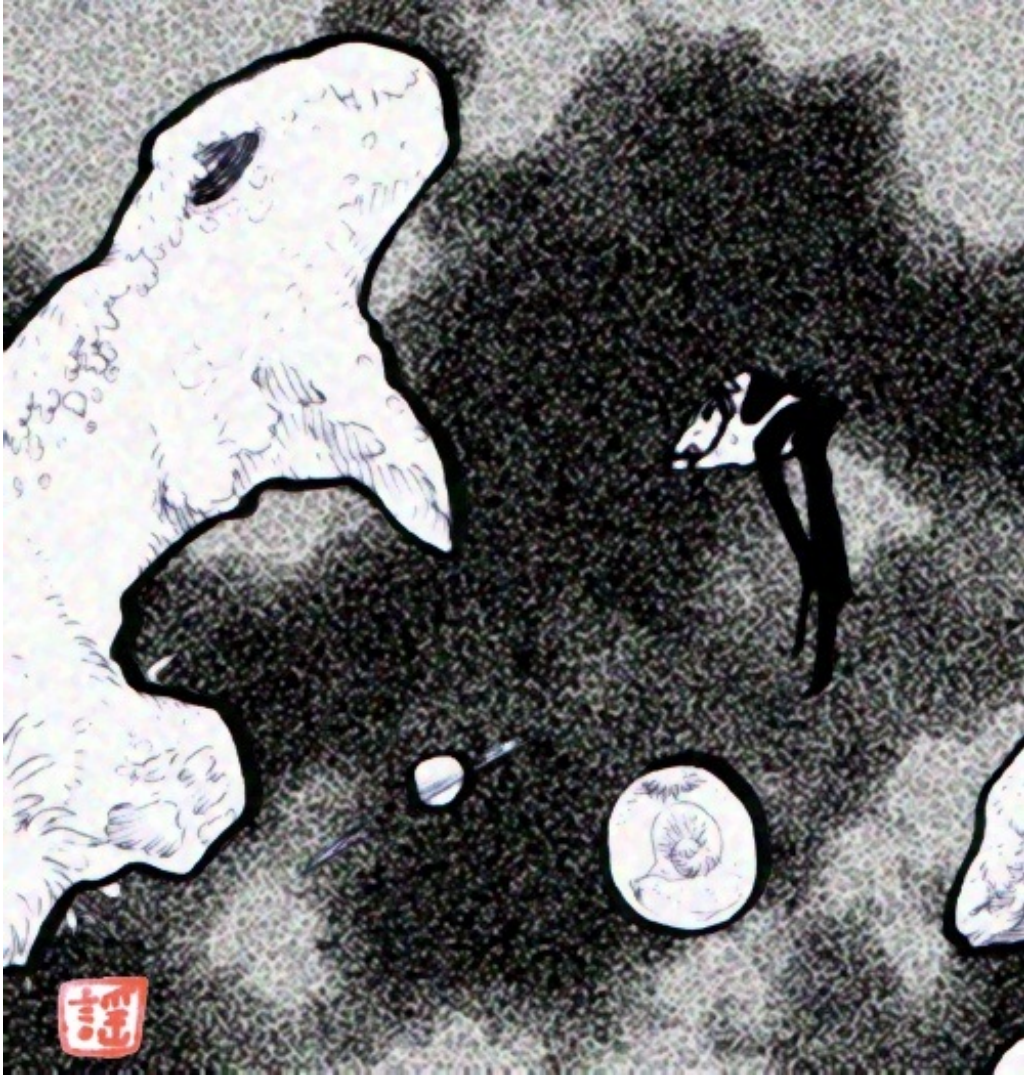


たいちょう犬先生「ふむ、これは素晴らしい”スクイドリノイシ”だ。」



たいいんラクシャさん「すくわせてくれるまで帰らないって粘ってたねえキミ。」





ラクシャさん「ああ、なにか鳴き声がすると思ったら...」



犬先生「これこれ眷属たち、かつてに深層ビッグバンせんようにっ

...ん、でもこれで足ぶつからんで良いかな？」



犬先生「この利器さえあれば、極寒の地も春だなラクシャ君」



ラクシャさん「それは俗に言う”こたつトラップ”だね...」





隊長ラクシャさん「おおっこれは見事な”ヒヨウチャクブツアレコレ”たちですなァ〜」



たいいん犬先生「お〜い隊長さん なかにもっと生息しておるぞっ」





犬先生「こういうところにいると、考えが純粹な謎へ向かうなあ、友よ

例えば私たちは何故 犬姿なのかな?とかサ」



ラクシャさん「それについてはもう仮説を立てたよ。8時間位かかるけど、聞く？」

ぐぐぐぐっ



ラクシャさん「大丈夫だから！もう充分温かいからっ！！」





ラクシャさん「これは...？」

何かのしるしかなあ」



犬先生「むう...脱皮した着物のおやことか、そんな感じ？」

昔よく作りました



ラクシャさん「くきや葉を作ったら、飾れそうだね」



犬先生「顔と名をつけたら、渋い声色で遠吠えしてくれそうである」





犬先生「こんな大きなコタツ石は初めて見るなあ！

ほら、ちゃんと片方の靴下が入った跡がっ」



ラクシャさん「跡、出るんだ...」

なんか、でてきた



ラクシャさん「あれ、食べ残してかれらに魔法生命を与えたのは誰かな？」



犬先生「大自然...」





ラクシャさん「作品名は『ぬくもり 良いじゃない』だそうです。」



犬先生「TVゴーグルをつけて完成だが、一度着たら100年ぬげないのでご注意あれ……」



犬先生「これで赤服おじいさんを作って配れば良いのかね？」



ラクシャさん「...うん、ちょっと話そうか」





ラクシャ「やあ、こんにちは。

犬先生は甘いものが好きなので、ことごとく関連イベントをしたがりまして...

でも、この箱は持ち帰って厳重にかくにん&処理の予定です。

僕は何をあげようかな？」

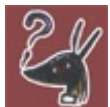


犬先生「どうも、私だよ。」

ラクシャはちょっと仕事に戻ったのだが、私のでここに何か貼っていったんだ。  
これがあれば、この時期も”むしろ安泰に過ごせる”らしいんだが

...ちなみに贈った箱のアレ、どうしたのかねえ魔の自信作なのに...

えいきし！！」



「未来にも、この愛らしい利器は残ってゆくのだろうか」



「懐かしさって、癒しにもなるからね

それにしても相当気に入ったんだねえ、おこた。」



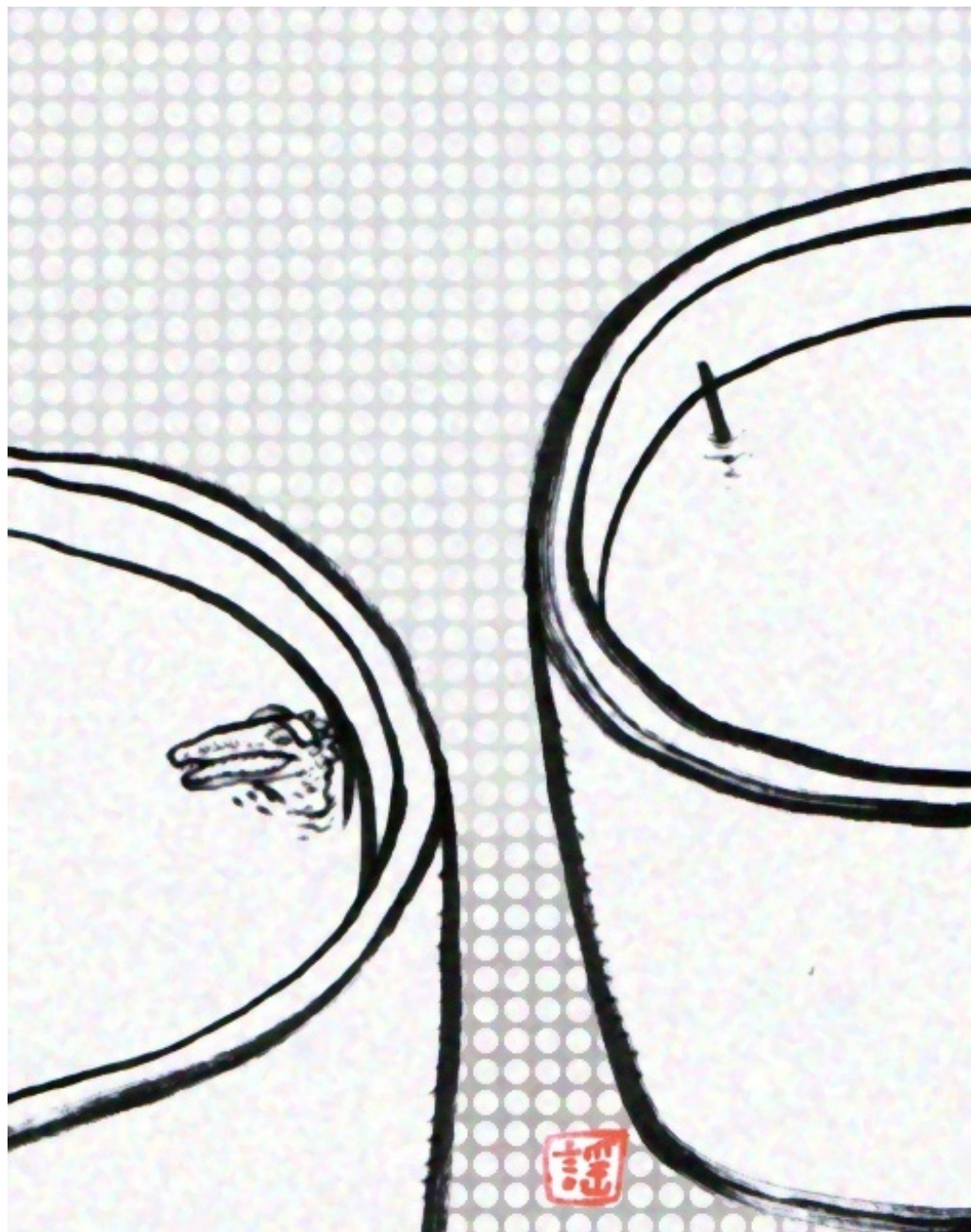


犬先生「なんだか思い出すなあ

あの頃は2匹ともまあこんくらいで、世界の端から端まで走り回って、変な花咲かせたり、遺跡を発見したり ...アルツ」



ラクシャさん「くふう...」



ラクシャさん「あ、久しぶりだなあこれ見るの！」



犬先生「あ、今日もつかってるなあ、ワニ...」



犬先生「魔域にもどったら、こんなの作ってみよう...骨族はよろこぶな  
あいや もうコタツになりたい! ぐう」



ラクシャさん (犬先生、寝てるのか起きているのかわからない...)





ラクシャさん「犬先生、もう互いに帰る時間だよ？そろそろ詰めないと...」



犬先生「問題ない、全ては炬燵の中だ 私も含めて...ふくめ.....ごふう」

こたつ、とはっ

---



犬先生「こたつって、母上のおにぎりの様だなあ」



ラクシャさん「こたつって、雲に包まれた様ですねっ

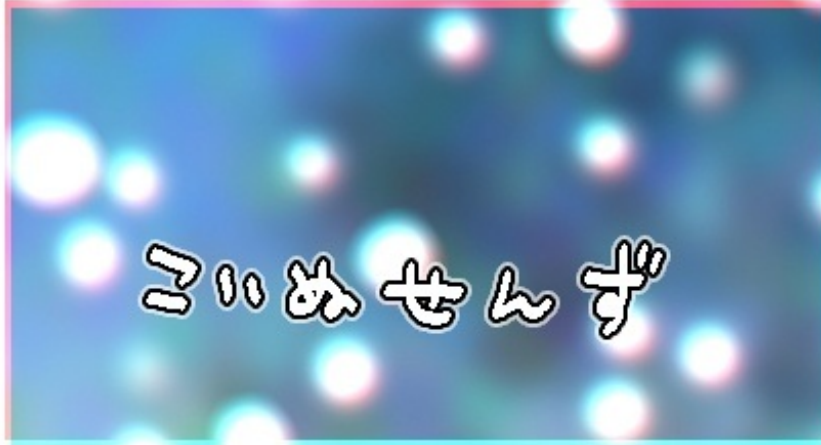
そして...」



両「コタツは いえのなかのいえだっ！」



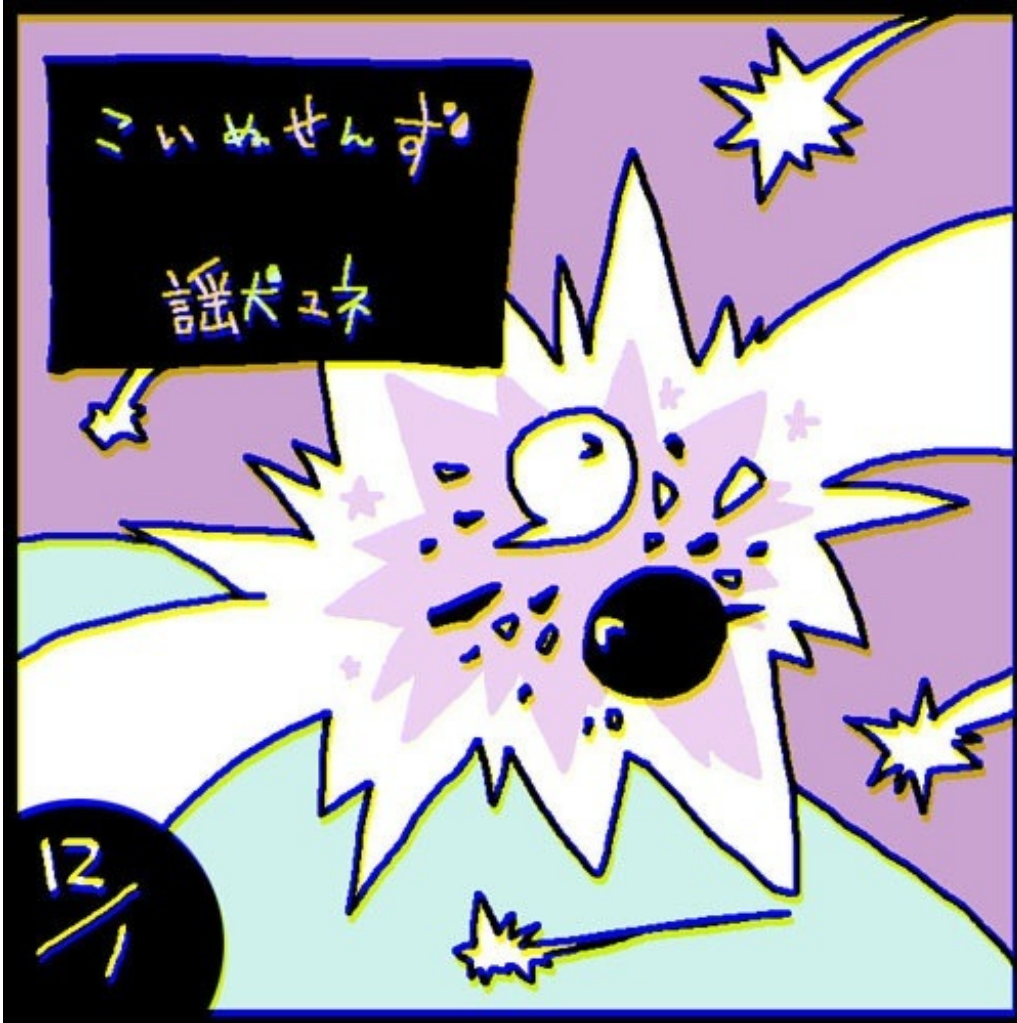
## - その 2 -



- ふりーだむ&謎めく黒犬・犬先生
- きまじめ&まろやか白犬・ラクシャさん

にひきの ふぁーすところたくつから、  
にひきの それぞれまで

かれらのおはなし、どんなかな？



くろいおそらに ほしがくる  
いろどり よりどりの いきたほし

とおいとおい どこかのじくうから  
ねむるいしきで うかんではきえる うみへと そらへと

ひらいし ぶつかり すがたをかえ  
よごと こころげんしょのまほろばに ふりそそぐ

そしてはじまる

いまはまだ ちいさなつぶつぶたちの こものがたり

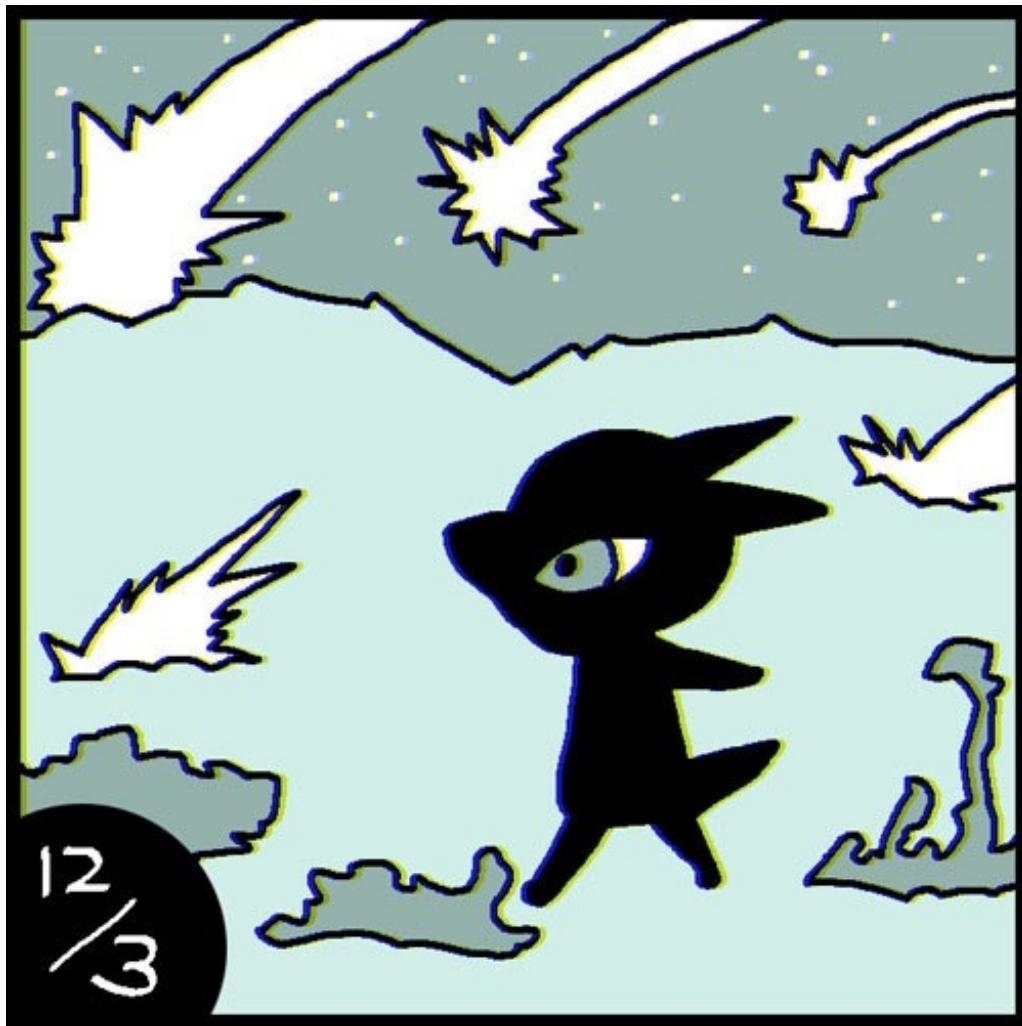


犬先生「あったなあ、そんなことも」



ラクシャさん「なんだか、遠くのことみたいだねえ」





ほしがふるだいちを うまれたてのなぞがあるく

長い耳に巻き尾 よぞらのように、それよりふかいやみの色のけなみと

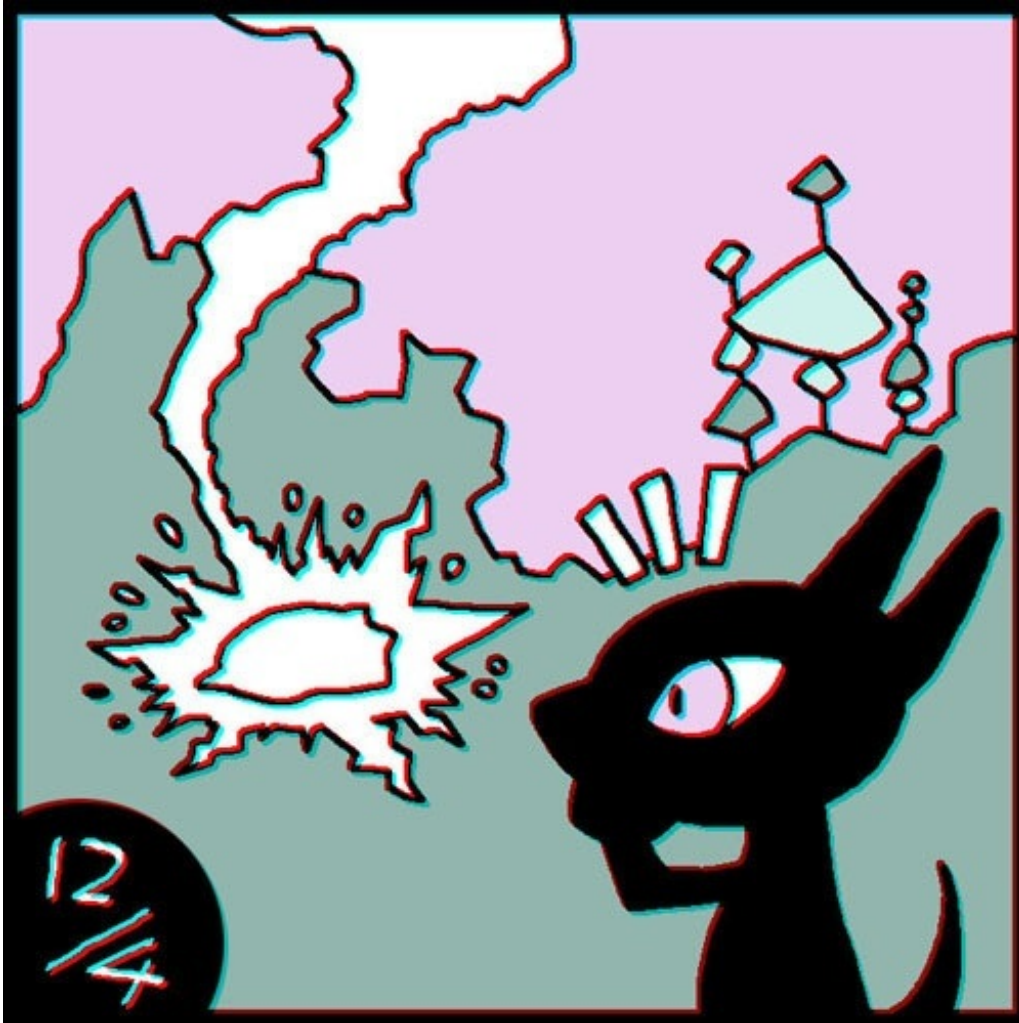
めいっぱいの 魔術と願いと なぞめいたおうこくと 「影」の意味するあらゆるものをみてきた  
まっかな両眼に 金の首飾り

名の文字はもう消えている

だからかれはもうじゆうに あるける、おどれる、うたえるし かじれるっ

落ちたほしがだんだん形作る花の野、数百年経たやうな森、いきて歩く建造物 弾ける光の中

そのはじめのおまつりのなかを、飄々とした足取りの ちいさき謎がゆく



ほしはいま ぱら ぱら とふるほどに

仔黒犬は まだまだ あらたなだいちに あしあとすたんぷ  
思うに (はんぶん たりない)

なにの はんぶん？

なぜ たりない？

しっぽをかみつつ くるくるまわる  
あたまをかたむけ ほしかじり あるく  
そして みた

あれが はんぶん？

われて わかれた？

やわらか あったかい しろい ほし  
ほやほやで まだもくもく

ここでやっと いきはじめる 仔  
仔黒犬は 意味のない・ある きいた・きかぬ 名を  
白いほしに つけたよ



犬先生「若かったね、私もなあ...ふむ、お茶漬けおかわり」



ラクシャさん「えっ それって...! あ、はい中盛りだね」





仔黒犬と仔白犬 あるくいつかの大地の上

仔白犬さん いきはじめてばかりで、まだよっちよっち ところどころで へたんくふんというので、仔黒犬もとっすり座る

おや 仔白犬さん、ふるふる震えとる  
仔黒犬さん 前足をさしだすと

バチン！

びっくりするやうなまぶしいびかびか ちょっと手にかみついた  
手はなんともなかったけど、新しいものがでていた

こまかいびかびかででけた花に ぷくぷくした葉っぱのしんしゅしょくぶつ

つついて揺らすとほころん、と水の音

このびかびかのお花 てをかざしたら ほおっと あたたかい

にひき すっかりゲンキになって、ほこほこぶつかりながらあるいたり ころがったりしつつ  
くりだしていった

ところどころに みたこともないものを しゅつげんさせつつ



犬先生「今はこたつからはみでるほど大きくなりました」



ラクシャさん「僕はまだ、風邪だけには勝てません...皆さんお気をつけへぐっ」



いきものでいっぱいになった まぼろしのだいち

ちいさなこいぬたちには もう みわたせぬほどに  
のび そよぎ はなひらかせ ちりつもり

むしも とりも くももうみも  
ちいさいのもおおきいものも それぞれ いきいき

はしるのも たべるのも ねるのも じっとかんがえるのも かわってくのも ありつづけるの  
も

みな かれいどすこーぶの ひとつぶずつのやう  
ひかりもかげも こころ ほゆる いちびょうずつだけの いま

おやおや 仔黒も仔白も 首と尾の先がよくみえぬほど長いいきものの



どちらにも頭があったことを 見つけたよ



犬先生「この辺りでワルは服を着だしたなあ...」



ラクシャさん「ちなみに犬先生 下には自作の魔法ずぼんをはいています」



仔黒犬は きょう 沼の森へ

巨大魚の歯を身軽にかいくぐり 顔のある木に頼んだ  
木の難解な問いに数度答え、しめの一回はとんちをきかせ

唸っているけど格別においしい果実を もぎとった

仔白犬は きょう 結晶川原へ

芯から冷えるやうな風の中 手を温めながらあるいた  
蝶になって飛んでいった石 中に白馬がすんでいる石

そのなかで音楽を奏でる素敵な石を 感覚のない手に

しめしあわせていないのに ぴったんこなたいみんぐ  
ちっちゃな傷も しもやけだって  
はいっとかわされる このひとときだと

ふんふん おはながなっているね

仔黒のちょいきケンだった冒険とわくわくも

仔白のちょいつらかった旅とほっこりも

いまは 渡された互いの までのい のなか

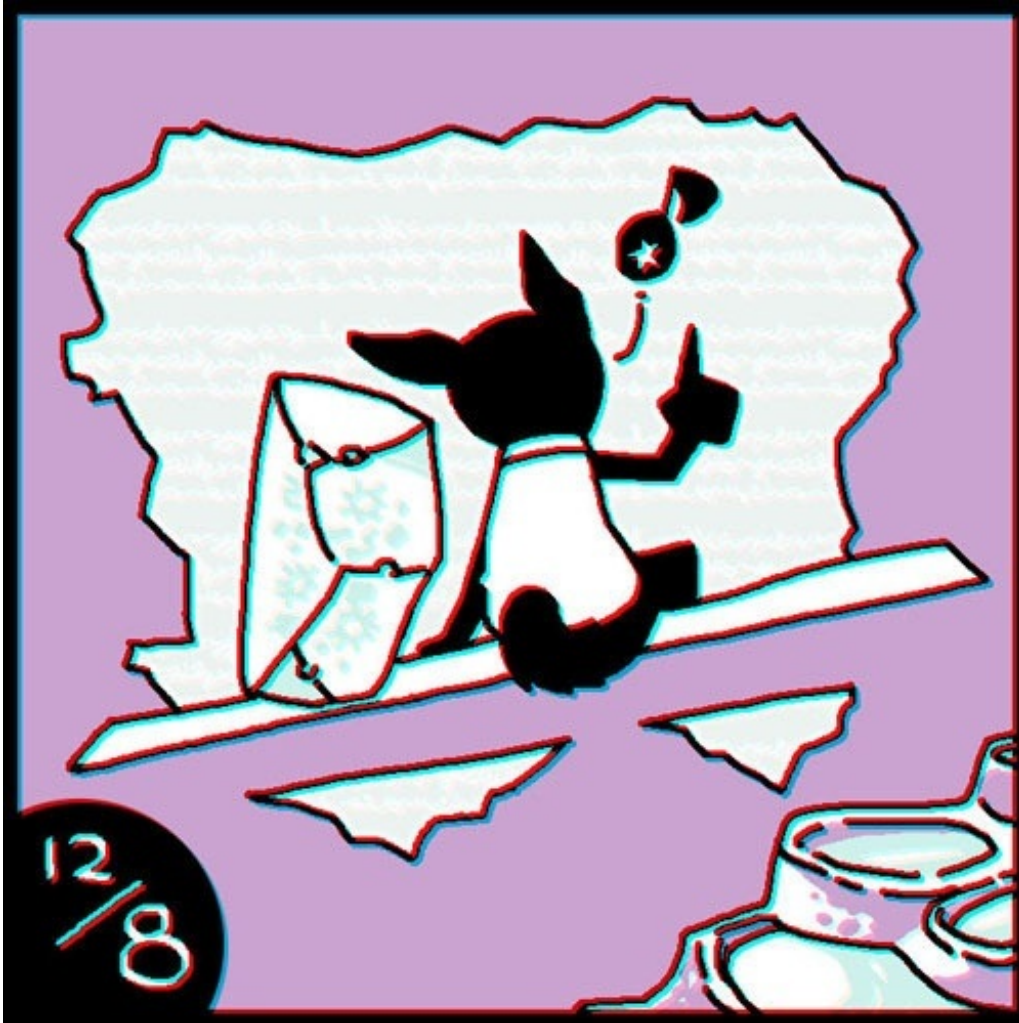


犬先生「それい、今日は私が半分食べたほねっこをあげやう」



ラクシャさん「わふわふ！ えっ」





だんだん とおくまでいけるようになり  
きょう仔黒犬は いわやのなか

外ではうえからふる したからわく げんきなかたちで おおいそがし  
おさんぽは いちにちおあずけ

ひびくどうないで みずからのこえをためす  
わんわんいうと びりびり 長いみみに はっぼうから  
たれるみずのおともいっしょに はんきょうする

とびまわっていたかたちたち 仔黒のそばにとんできた  
のびんのびんしながら うずうずまってる

と 仔白犬にもらった石が 音を鳴らし始めた

星の音や 氷の音のように

添えるやうに そろってうたうやうに 奏でられる はじめてのわるつの調べ

形たちはすいすいと仔黒のまわりを まいとび

仔黒はそのうちに すやすや まるくなりました



犬先生「すやすや...」



ラクシャさん「壁画みたいな寝相だなあ」



仔白犬と仔黒犬 きょうはにひき

仔白は渚にあった四角い結晶を かつちりつんでいく  
雲にならないうちに、塔にするんだ らしき

仔黒は暗い淵にあった粘土を練って 未知の像を造形していく  
うまく動いたら、放して飛び立たせやう らしき

浮かんでは変わりゆく 不安定な空間に にひき  
似ているやうでちがい 違うやうで にている

黙々 なのに おちつき

黙々 なのに わくわく



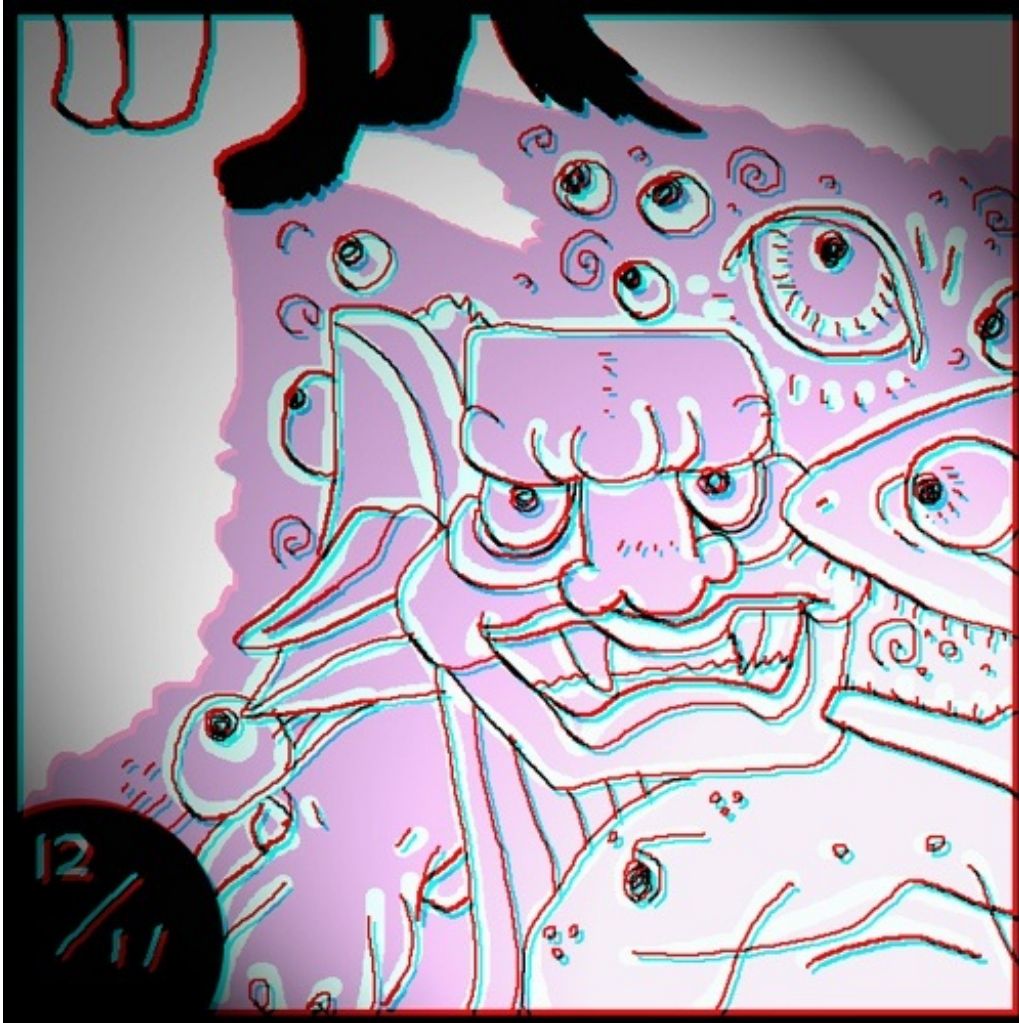
空からは 羽根の一枚一枚がリボンになってほぐれてゆく鳥が  
鈴のころがるやうな声で 鳴いた



犬先生「像は放す前に元気に飛んでいったなあ」



ラクシャさん「結晶たちも、塔になる前に ぜんぶ元気に飛んでいきました」



仔黒犬のあしもとに 濃く長い かげ

生きて動くだいちにおのずから出た・黒白のこいぬがぼこぼこ作ったものたちが  
あふれるやうに

うごめくものたち かげのなか

仔白犬は なにかがかわってきた という

仔黒犬は ここはいきてうごくから と かげをみながら

ひとしらず あてもなく なげすてられた くるしみ かなしみ うえ つらさ いかりが  
はなたれて さすらうはてに すがたをかえ

仔黒犬に なついている

だから、鎮まるまで そうさせておくことにした

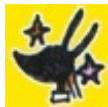
にているから

そのうち少しでも軽くなれば 仔白の作る雲にのって こんどは楽しく 旅をする

どうぶつでも ものでもないものたち

仔白は 壁画の眼差しの横顔を見て いつか大きく隔たったところに行ってしまう気がし

仔黒は いつかもっと深い場所へゆかねばならぬ気がした

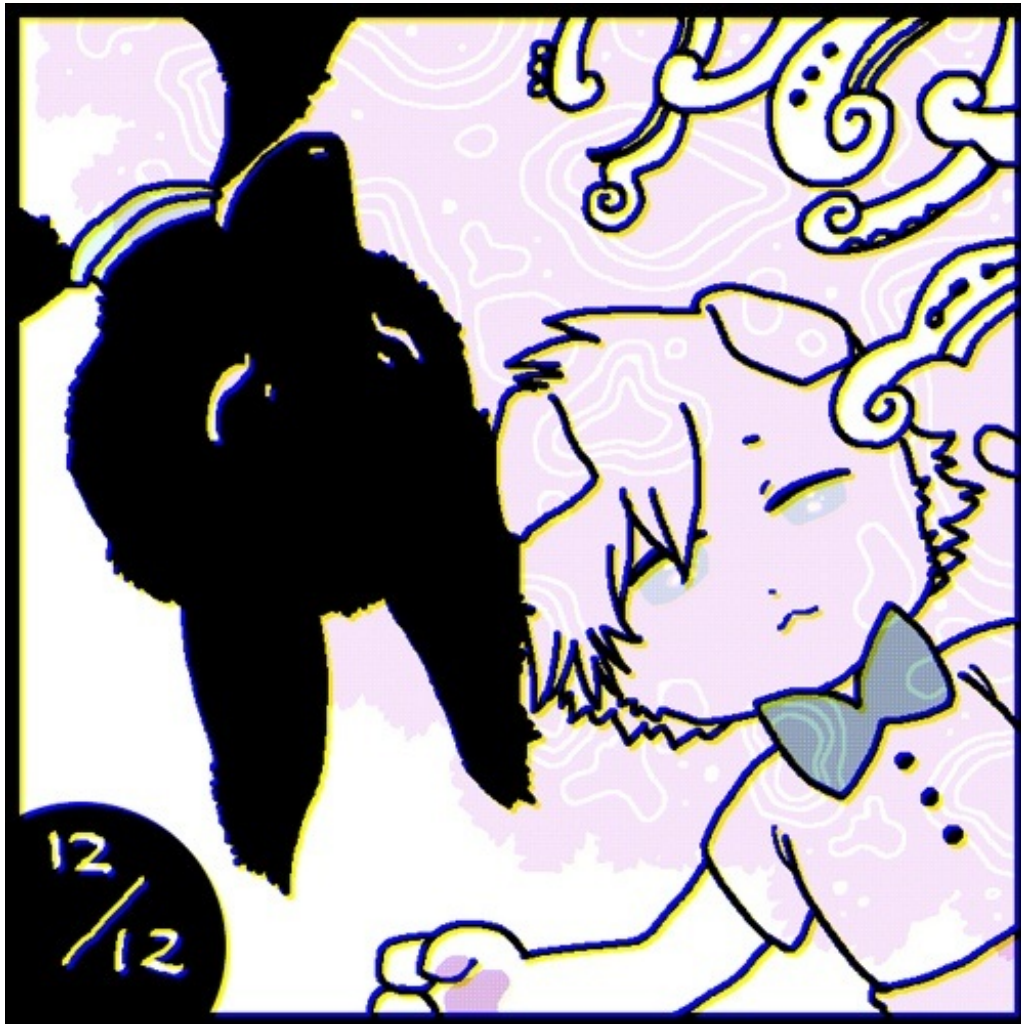


犬先生「イヤしかし 私はこの場を離れられん！せめて角切りチーズを…」



ラクシャさん「”こたつトラップ”だなあ…」





無数のういんどちあいむが下がる、分子構造のやうな大木

その下の 仔白犬と仔黒犬  
まどろみと、それぞれの黙想へ ねころんだまま

仔黒犬は 目をつむって新しい音楽を空想している  
誰も見たことの無い粒が 反響しながら どこまでもころがってゆくやうな

それは長い鼻先から 戻ることなく くるくると わきだしていった

仔白犬は、雲を見ている  
しゃらしゃらと風の触れてゆく音に彩られた みずいろの空の 虹色の粒子たち

それは まぶしくてとじた目のなかでも ちらちらおどり やがてきえていった

すべてかききえて なかったことになる ということとは またちがう  
だから わすれず わすれ えがき まなび うたえば

どこかで にたやうなことを またまったくちがうやうなことをしているとおもえば

すべてのものが生きて動き かわってしまうせかいても ぼくら ゆける

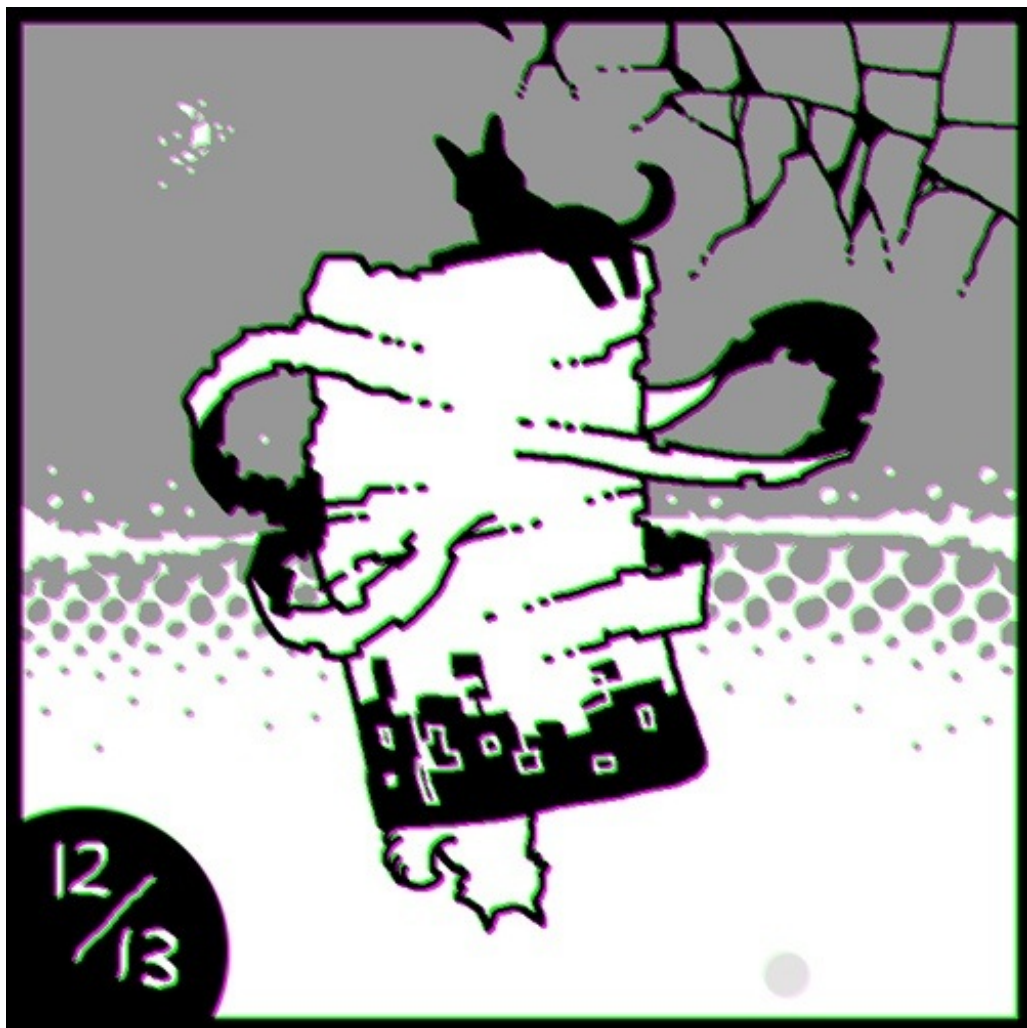
...でも、いまは ひとやすみの こくびゃくの にひきです



犬先生「おや...私の歌その辺に転がってないかね？」



ラクシャさん「君のりんごヨーグルトのかげで明滅してるよ？」



仔黒犬と仔白犬

浮遊する岩の上 同じやうで 同じ場所でない  
それぞれの極に伏すこいぬたちは じっと

こしかたを みつめる みまもるやうな まなざし

そのころのなか それぞれに、ひろがるもの

ついに与えられることのなかったものを思いつつ吠えた  
古代の祝祭の 闇をしりぞけるほむらの前

おしのけることも はいでることすらできなかったなかでくれた



やわらかな毛並みの母の ほかのこへ与えるのと同じぬくもり

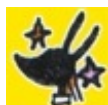
そこにとけあう にたものだった ちがうものだったものの ころのひとひらずつ

たまごが 息が 土が 大樹が 花々が 歌が 翼が 骨が 銀河が  
さまよう星だったかれらに 沁み込んでいった

げきとつし 二つにわれたほしは ほんとうはふたつだけでなく  
うまれでたふしぎないのちたちも また

忘れ得ぬかけら そこからつくられてゆくかけらたち  
かけらとしてでも かたちとしてでも

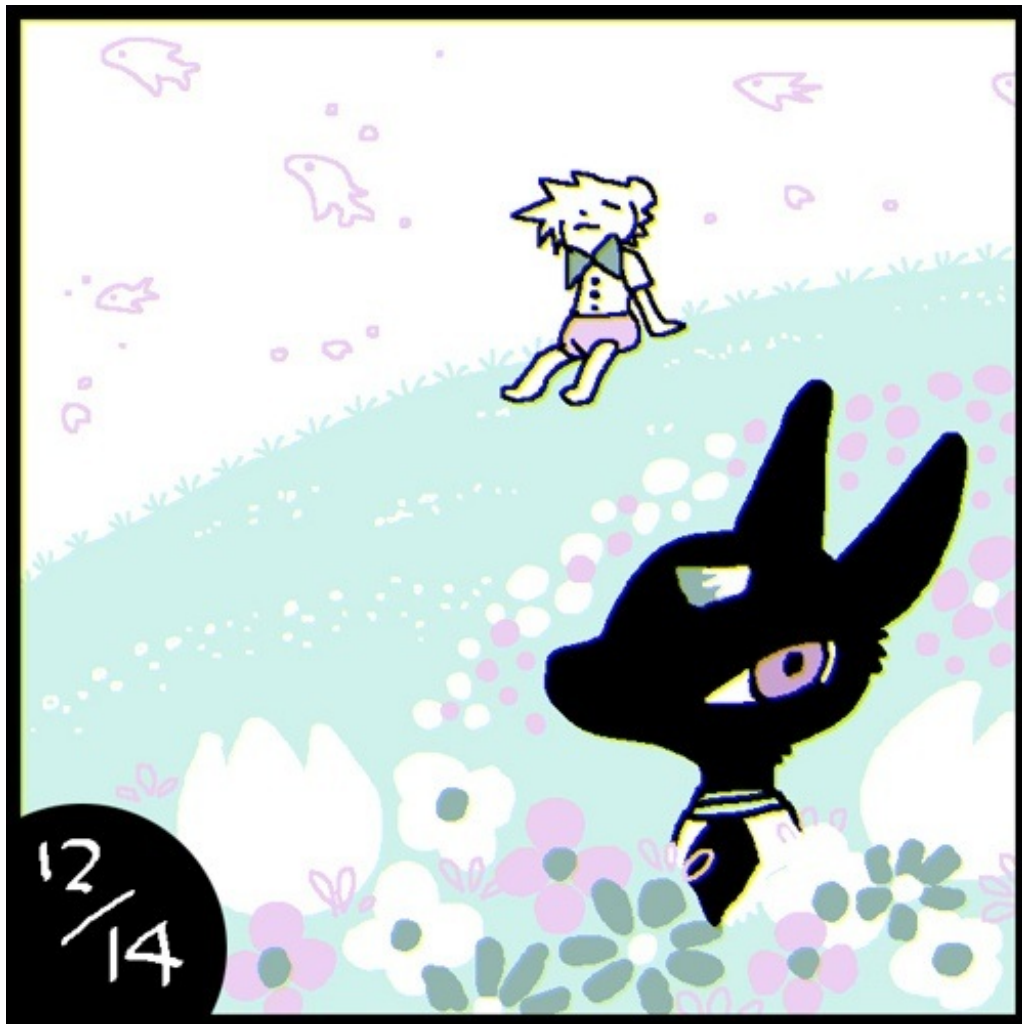
きょうは こいぬ団子になって 眠ります



犬先生「これも私の一部なのだがねえ」



ラクシャさん「しっかり仕舞おうブラックホールはっ！」



まぼろしのだいはいま まぼろしのはなざかり

わいわい ころんころん こくびゃくのこいぬたちが あそんでいる

硝子の魚が飛び回るくうきちゅうには あまい・きりっと・みどりの・さわやかな香りのうみ

仔白犬は ぽかぽかしている野原で うつらうつらしている

ここにいろいろあること、ないこと、あったこと これからあること ふしぎだなあと思い

仔黒犬も 満開いちめんの野原で うつらうつらしている

りんとした、しかしいずれ変わるいのちがそこらじゅうで ねっけつしとると思い

ふしぎでねっけつのはなのはらは

こいぬたちがねむるうちに

にじいろの波間模様になり 鳥や粒子や蝶や 古代のはじめての脊椎動物などになって  
空じゅうに 放たれていった



犬先生「86めんたいさいころ うまし...うとうと」



ラクシャさん「あ、それは草原とアリス症候群がディラン効果によって...うとうと」





ひろいひろい はてまでいくうち 「ここ」にもまよう  
ゆめにまどろむさきの だいち

こくびやくのにひきは 「ここ」をつくらふ とおもった  
にひきがこのにひきで いるうちに

てんよりたかく、どうどうとどっしりとして、せんねんのめいきゅうのやうな！

つち こねて  
きぎれ あつめて  
とんかんとんかん くっつけて

つちときぎれが このつちときぎれで あるうちに

みるみるうちに

わりとたかく、かぜでてっぺん ぐらぐらして、こんぱくとながらもののおきばにまよう！

すてきなうちが できました



犬先生「今なら迷宮も作れるが、出るまでこたつに入れぬしなあ」



ラクシャさん「ほんとうにお気に入りなんだねえ、おこた」



にひきのころに すてきなかたちがあるうちに  
できたてのおうちは いきものになって とびたっていった

まるいはんとうめいのからだに よろこばしように ひれをはためかせつつ

よいしょよいしょ みな いまはおとのきこえぬそらの かなたに

うれしさうだったね  
むこう なにが あるんだらふね と 仔白犬

いつかきっときみ それをみるよ  
ちのそこ ころのそこは 私が



そしたら いずれ どっちもわかるね と仔黒犬

からだのなか ちでもえいよう でもない  
なぞのなぞりの みえないかわが おともきかせず ながれてさっていった

ふかふかのまえあし つないでたちつくす とわのこいぬたちのところから  
とおくでういんどちゃいむのなる そらのかなたに



犬先生「魔域のアペランド土産を持ってきてあるのだ ほれほれっ」



ラクシャさん「...このアペプさん人形、腕から外れないんだけど...」



きょうのにひきは なみうちぎわ  
あわや とりや しまが ゆうゆうと頭上のおそらを ながれてゆき

なんだかわからないものが 波間にはねている

あれはなんだらふ と  
仔黒犬 上手に潜っていった

ぼくも はねやうと  
仔白犬も ゆうきをだして潜っていった

姿がすこしずつ かわる  
しっぽだったひれが びくっと

でも うまいぐあいに 海の犬にヘンシンし

仔白ははねて 綿雲の行く空にいっしゅん 加わり  
仔黒は潜って 目の光る何者かの過ぎるおおうみを みまわした

みたことのない視界 みたことのない色や形たち

発見し 一気にたくさんのおはなしのたねを見出した こくびゃくのこいぬたちは  
ぽかぽかの波打ち際で まるく ゆめをみる

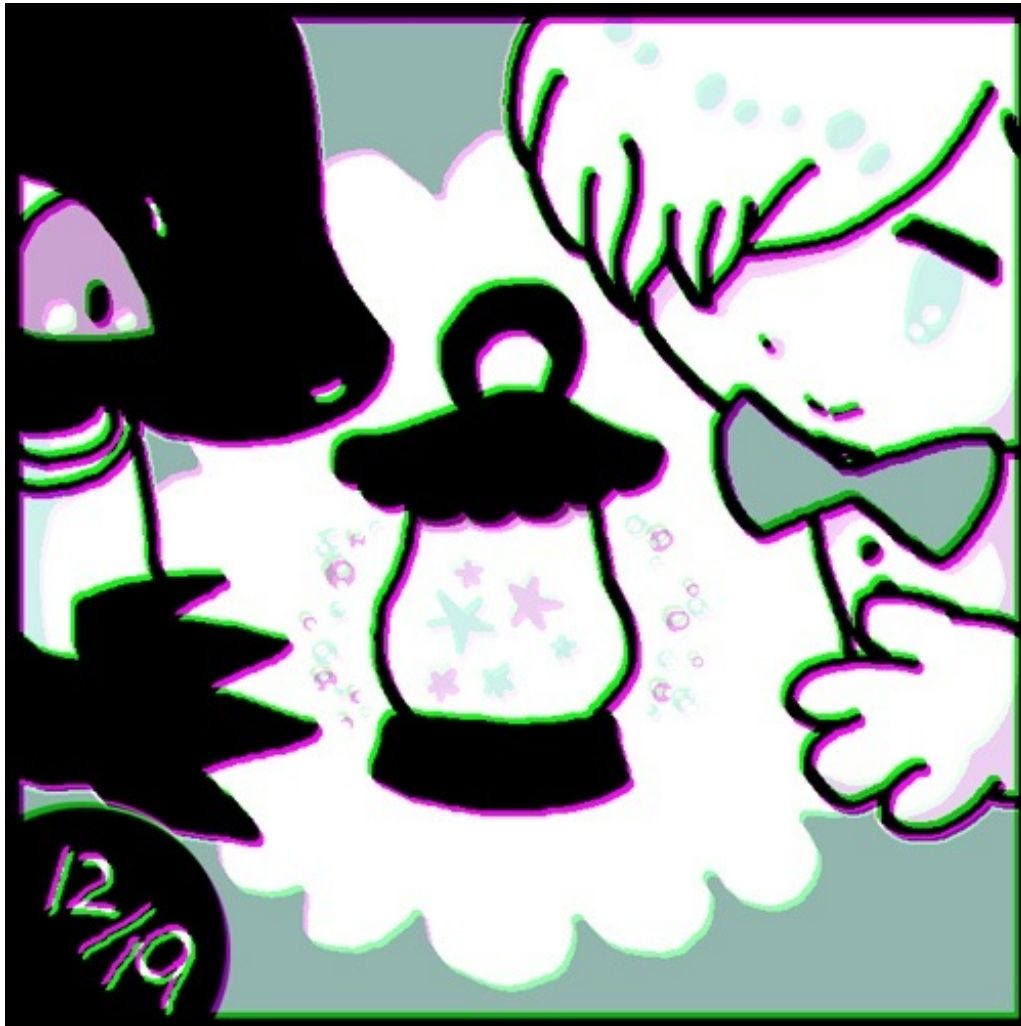
いきるもの・うしなわれつつあるもの いくせんもの  
どこでもなくもまを なみのおくをさまよう みえぬほしたちのところにふれつつ



犬先生「あまり変身しすぎると、どれが元の姿か...いや、元の姿というのは...」



ラクシャさん「魔法犬仕様の干し柿届いたよ～！ 今出すねっ」



どうにもしずんだそらだった

にひきの黒と白のこいぬ 歩きながら こつつん どしん  
どうにも、あるきずらいねえ

なので、つくってみた

仔黒犬は うなだれた鉄の木の枝から一本 たのんで、もらって  
ぐるぐる ぎうんと曲げて 巻いて

骨組み つくった

仔白犬は 割れ落ちていた硝子氷河の一片を そうっとひろって  
骨組みに よつつ はめて



手を温めるやうに ちかづけた

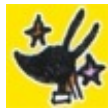
するとひろがる ほこほこ ほろほろした灯り  
いっしょにつくった ちいさなランプ

どうにも巨大なしずんだそれも、さすやうにこごえる ひょうせつのみちも  
それならそれでいい ホントはのはらもいいけれど

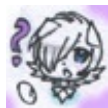
あるきたくないときは いっしょにそれぞれ ひとやすみ  
そうして いまは あるいてゆける  
ぼくらがこのぼくらの あるうちに

そうしてにひきの両まえあしにつながれた ちっちゃなランプは  
カランカラン うたって てをふったよ

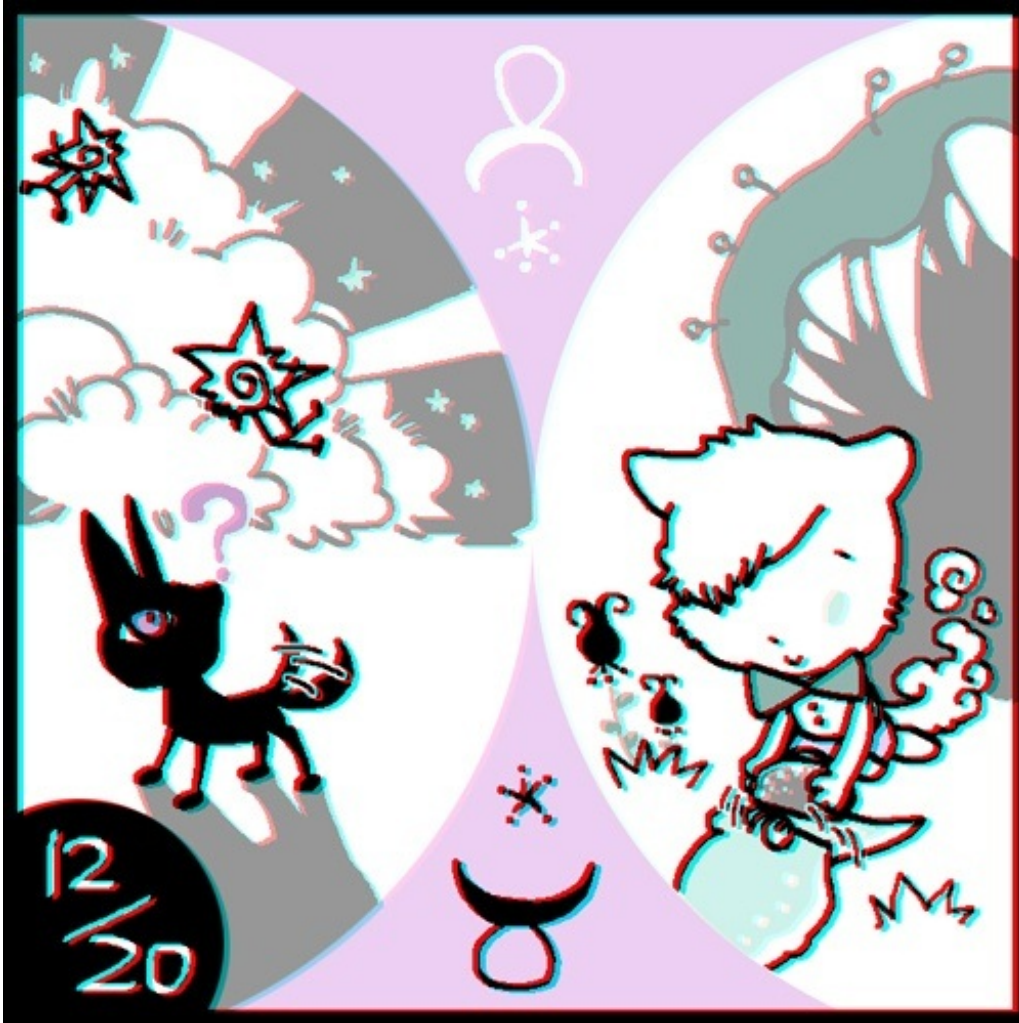
絵のやうにとおのく 鉄の木に 硝子の氷河に



犬先生「お、カランカランいっておる」



ラクシャさん「1等 愛犬用けいたい電話？」



仔白犬は みつけて 石をどけた

下にいたのは 大きなわらすぼみたいな怪獣の赤さん  
きいきいって 母ちゃんに とびついた

誰にも見出されず ひとりでたすけやうとしていた母ちゃん怪獣は  
みにといっしょに きゃっきゃっ 土にもぐってきえた

ありがとうのかわりの ごるるる...という 唸りと一緒に

仔黒犬は まだら模様の荒野で みていた

錆びついた宇宙船が やっと見つけた新天地に突っ込んでくるのを  
きいきい どっかーんとさくれつし 船も乗組員も 美しい光の花のなか

何処にもたどり着けず むじゅうりよくの闇の中ひとしれず泣いていたひとびとは  
好きな色に輝く星の頭をしたこどもたちになって 荒野の果てに飛び去った

ありがとうのかわりの まぶしくせつない きらめき信号と一緒に

にひきは それから ならんでだまって  
それぞれのところで鳴る音楽もそのままに  
とおぼえを したよ

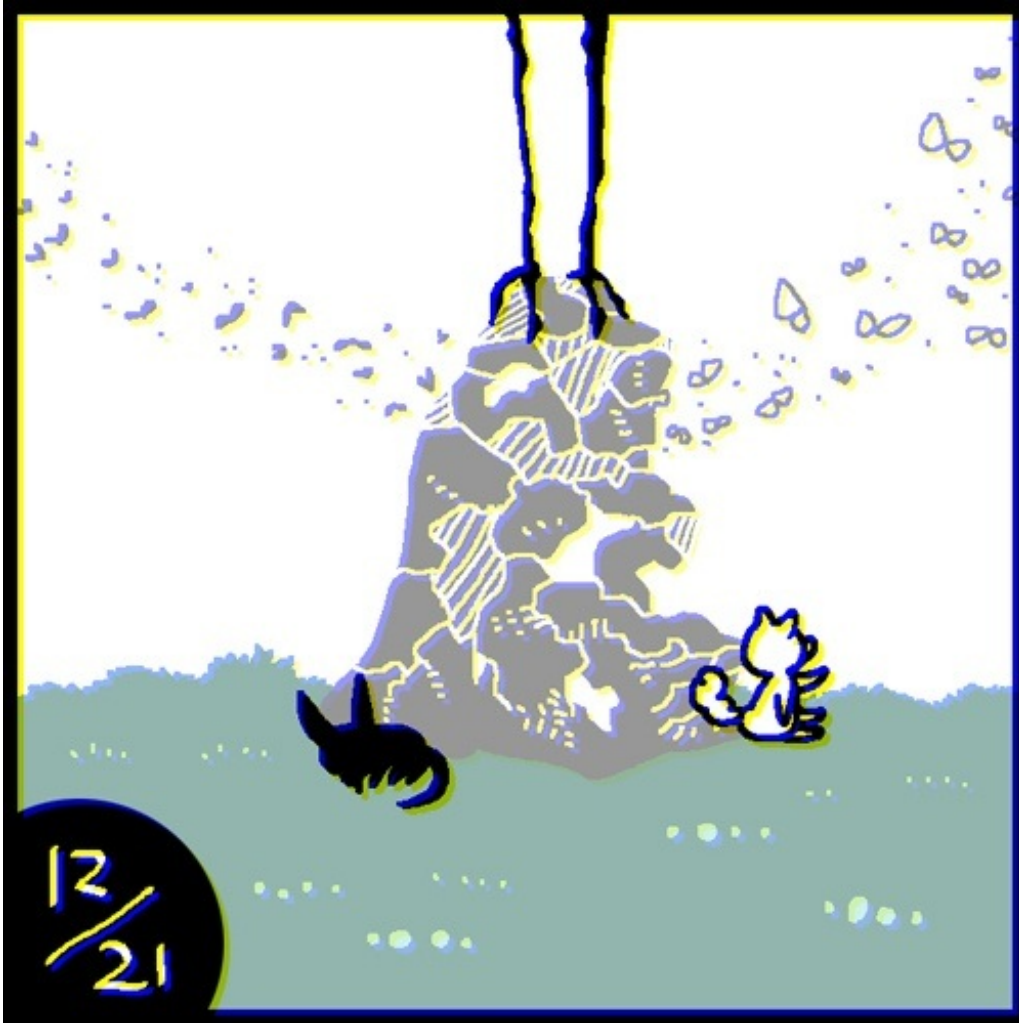
ちのそこまで とおく  
そらのむこうまで とおく



犬先生「わおおおお～んがふげほっべくしっ…… フウ～もぐもぐ」



ラクシャさん「遠吠えってしばらくしないとしてみたとき何だか意外だねえ もぐもぐ…」



にひきは丘で みわたしていた

すっかりゆるぎなく かつ ゆらぎつつ 形を変え続ける 心象のはるかを

森 荒野に砂漠 雪原 高峰 くねる川のさきには まるい原生動物達の浮かぶ うみ  
きのうはなかった家々も 空中花もゆらゆら生きてあるき

たくさんの粒子を運ぶ風の群れを連れた島が  
半透明の巨大な船のやうに すり抜けていく

こぼれた粒子たち 時計鳥のまわりを まわりはじめた

柱時計の頭をもつ おべりすく のやうな鳥はじっと動かぬまま 振り子をふる



仔黒にふってきたつぶたち わさわさの背中やおなかで 銀河模様

仔白にふってきたつぶたち まんまるの青い目とひびきあって 白い蝶たちに

みあげると柱時計の頭の鳥は おおきな泡の頭をした鳥になっている  
ちいさな木の芽と胚がねむっている 異界のたまご

気づいていないこいぬたちの おしりの上にも みけんのうえにも

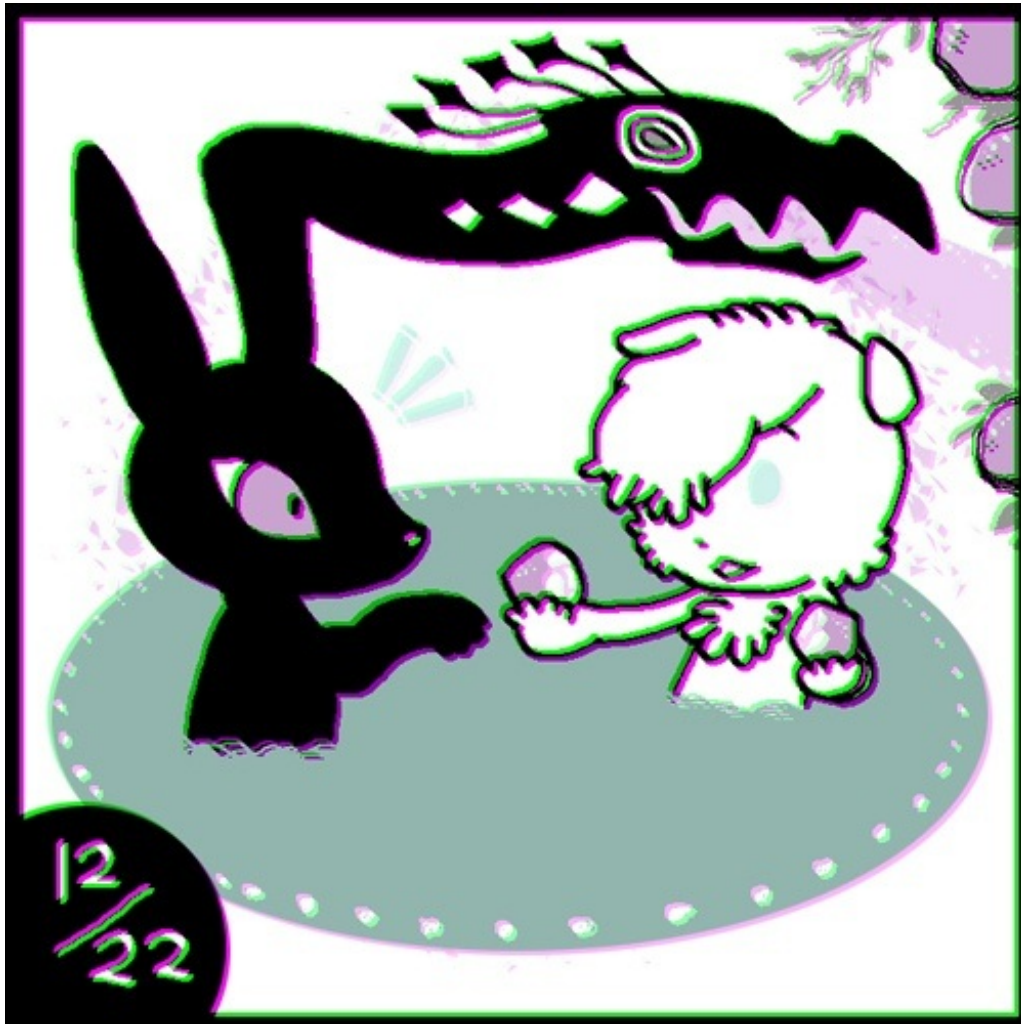
あるまんだいんの濃赤色とあくあまりんの淡青色の ちいさな眼差したちが  
いつとき似たおもいで 見あっていた



ラクシャさん「どうしたんだい、おなかじっと見て」



犬先生「いや、我が腹宇宙ちょっとばかり膨張してきたかとな...」



あたたかい泉に にひきはすっかりひたっている

仔白犬がみつけ、仔黒犬は長い尻尾をふりふり やってきた

ぐいぐいと ふたつのおなかへ へんなふうになった

仔黒がへんてこに成長させた木の実 仔白がたのんで・もらって

とりわけて たべる

ゆるゆる わふわふ ぺるぺるしながら

にひきは、なんだか 意味深いものごとにふれた気も 少しした

それぞれちがう はてしないほんとうの ちいちゃな前足のひとつかみ

しかしてそれは びこうにあまくひろがる まぼろしのかじつの香りといれかわりに

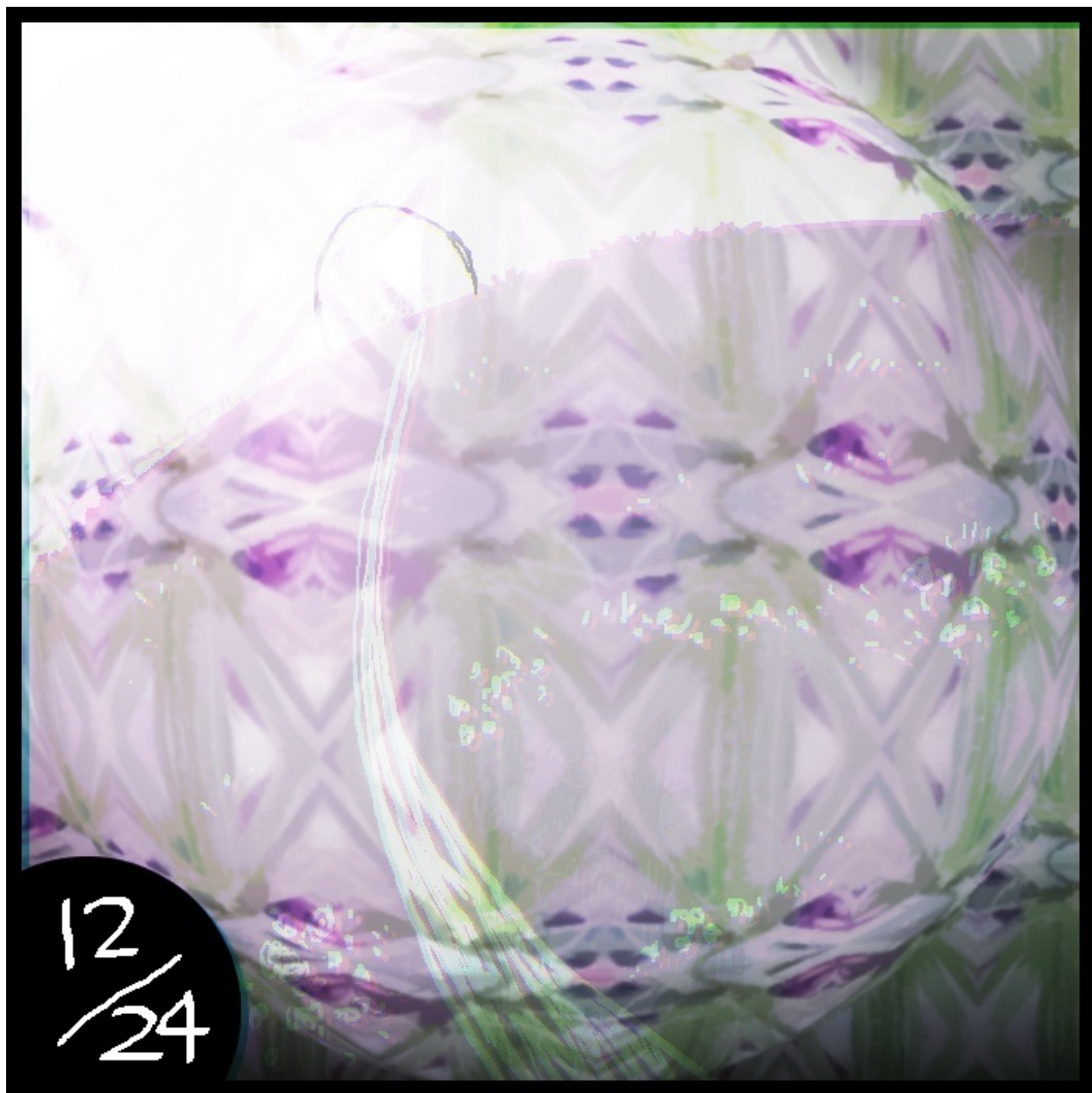
こころのおくに ねむるやうに泡をたちのぼらせつつ 潜っていったやうでした



犬先生「たらばガニはカニではないのだ」



ラクシャさん「ふ～ん ……エッそうなんだ！」



12  
/24

ゆめのなか ゆらめくおと ゆらめくけしき

なかでは そこがゆめやうつつや みさだまれぬまま ほうこうし



そこだけにはっせられる なにかのすがたを やがてみる

黒仔犬は こんな ゆめをみた

みわたしていた こうばくたるけしき どんどん どんどん とおざかり

すいちゅうのうちゅうにうかぶ いきた あわたちのなか それぞれに

いきるたまごのやうななかに ふっていく とおいところからきた ながれぼしたち  
粒子のてーるをひきつつ きずついて眠るやうに 微笑むやうに わくわくするやうに

さうだ 私も白も ああやって ここへきたのだ

と やけに視界の 光たちがゆらいだ

仔白犬は こんな ゆめをみた

あわがたくさん すろーもーのやう それが どんどん どんどん 近く大きくなり

すいちゅうのうちゅうにうかぶ いきてうごく大地や海に

とびこんできたほしぼしどうしや ほしと大地がぶつかり さくれつし 生まれる新たな形  
粒子のてーるをひきつつ 弾けながら 欠けながら おもかげのかけらを核として

さうだ 僕も黒も ああやって いまの僕たちになったんだ

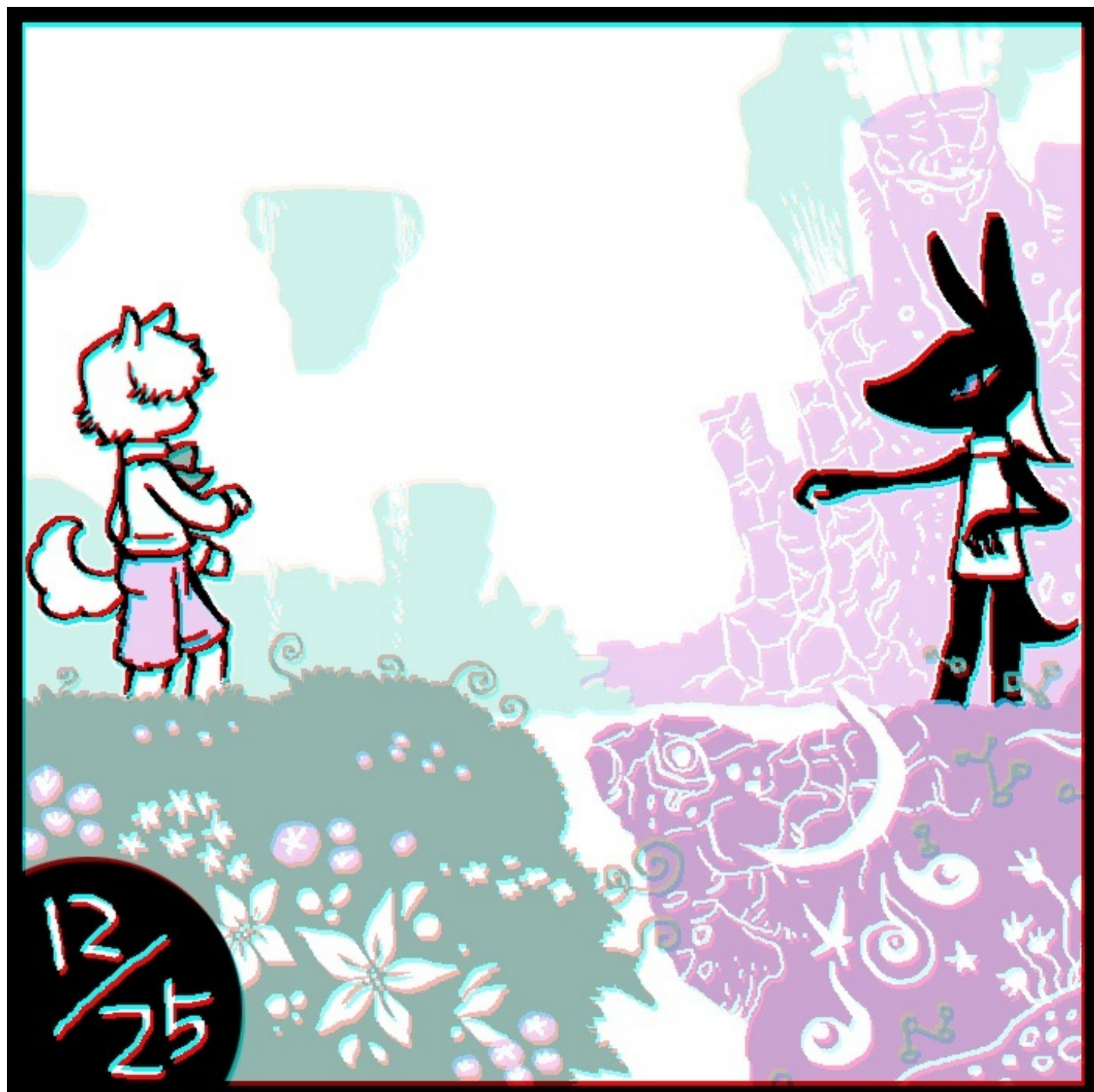
と やけに視界の まほうの破片たちがゆらいだ



犬先生「ああ...星がみえるではないか」



ラクシャさん「湯あたりかい？はい冷たい水っ」



どこかも さだまらぬ まぼろしのだいの

そこに われおちた さまよえるほしほしのなかの

ふたつにわかれた こくびゃくのこいぬたちは

いまや こくびゃくの まほうの旅人たち

かれらは きょう はじめることにした

私は どこか深い 闇の淵に 謎めいた広場でもつくるさ と 黒犬の若者

何でもなくなり さまようものが すきずきにのんびりして

はきだされる あらゆる旅の土産ばなしをのみこんで いっときずつの魔法を披露するのだ と

僕は どこかの空の片隅で 光で書く図書館をつくるんだ と 白犬の若者

何でもなくなり さまようものが しずかに頁にいこいて、ゆめをみはじめれば

そこでやっと 割れて欠けて 流れ着いたものたちは それぞれの好きな物語になるよ と

波間の模様のやうに ゆらめきつつ つぎつぎ形をかえる 大地や木やうみ

どうしても忘れられぬ記憶たちからなる 旅人達

忘れ得ぬ ナツカシイ ところ

はじまる あらたな ところ



にひきは せつなげに また はれやかに それぞれの みぎてのひらを だす

かれらにそなわった要素は

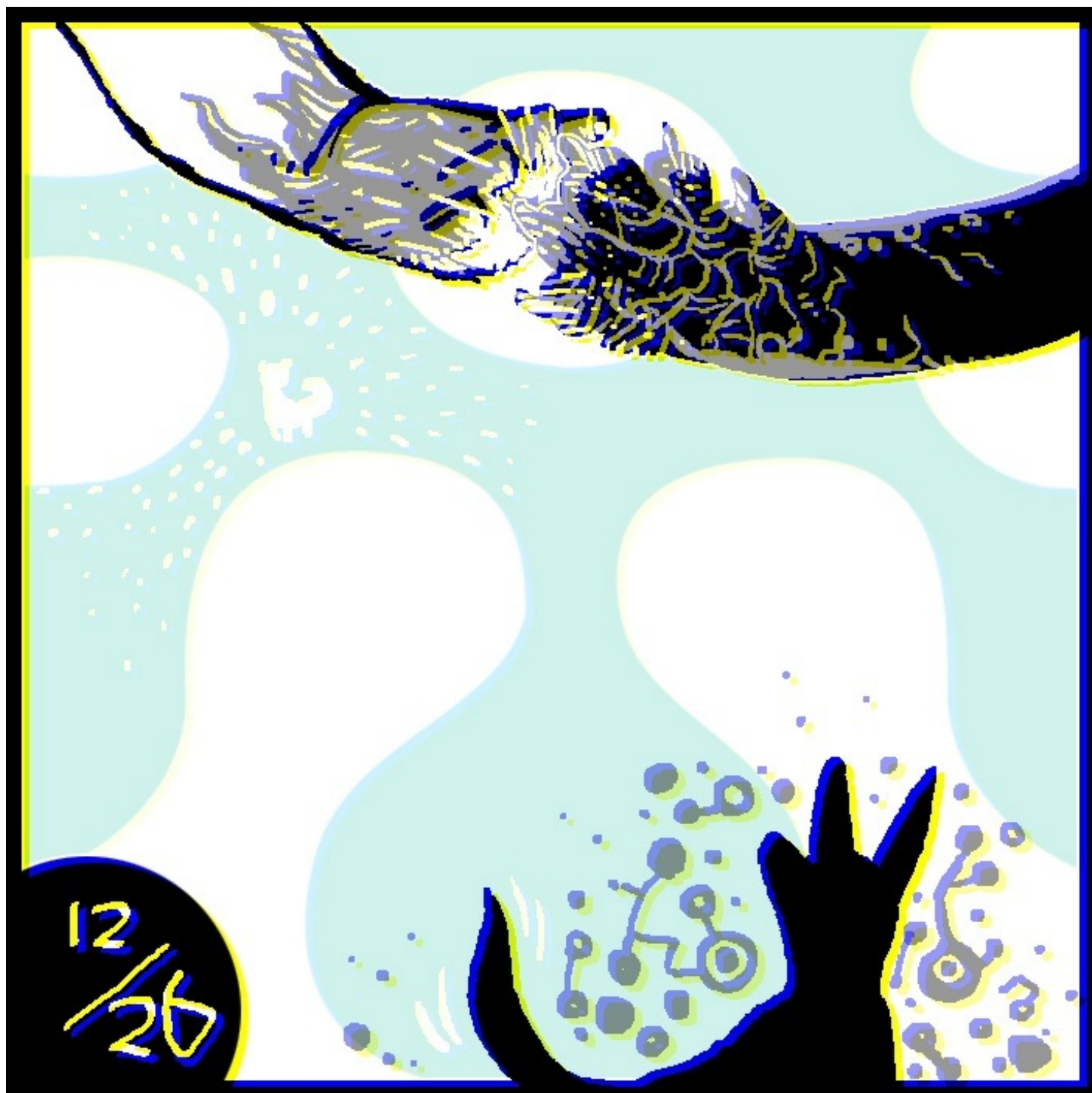
となりあう互いのからだを粒子と化すほどに つよまっていた



犬先生「枕元にアヌビス臥像フィギュアしかも厨子付きである！細部も繊細ッ」



ラクシャさん「わあ枕元に枕、しかも枕つきだあ...！」



われた ひとつのながれぼしから にひき  
いや もっとだったかもしれない

くろとしろの にひき

お話し なにかつくり、鳴らし 走り、あそんだ  
どこかもさだまらぬ だいちに

おおきくなった にひき  
ともに あるくだけで  
白は黒にぬりつぶされてしまいさうに  
黒は白にかきけされて しまいさうに

こころは ちがっても  
そなわる なごりの核とちがっても

まえあしをかざし さくれつとともに ほわいとあうと・ぶらっくあうと  
こうさする ぶつかりあう はじける 飛び回る 粒子たち

ぶつかるたび はじけるたび あらたなかたち あらたないきもの

こころの沼とあかりの欠片をそれぞれ持って流れ着いた まほうのにひきは  
そこが大好きになり やっとほっとして おおいにあそんだ

にひきのおんがえしは、ひと夢ずつの 未知で奇妙な祝祭に ヘンで温かな華を 添えること

はじまった 奇妙な鳥や古樹の音楽 お城も星も、踊りだす  
ここでは 世界も細胞もかんけない 嘘も誠もくるくる歌い 皆 しずかでのぎにぎしい  
素敵で異様な おまつりのなか どんどんくわわり 好き好きにたのしむ

それぞれにつつまれ やわらかに 遠ざかる  
かつて つないだ 前足たち  
いまや 姿すらかすむほどに ゆらめくじくうの かなたずつ

にへっとほほえみ しっぽ ふっているよ



犬先生「いまはこれがせいいっぱい...ふごふご」



ラクシャさん「これこれ 寝ぼけてラフレッシュ出さないっ」





まだちいさく けだまのやうな尻尾をふりふり やんちゃにはしる わん いっぴき

いつだか どこだか せかいのなか こころのなか

こどうのおとが まろやかにひびく

かたほうの耳をオヤ?ともちあげ、あたりをたんさく

そうするうちに どどーんと 白い地面からおおきな おおきな 花が出たよ

ふってくる きんすなご ぎんすなご

地面も いろいろ ためすやうに模様が でたりきえたり

水玉かな ななめのしましまかな 星なんてどうかな 雲やきらきら模様は？

そうしてできた またべつのくうかんに いちまいのちいさな絵が

まごっこからうけとったおばあちゃん にっこにこ  
いろいろどんより曇ってたところ スカーツと陽が照らす

すべての雲が晴れることが無いことをしてたって そうであっても

記憶と素敵な遊び心でつむがれた ちいさなおくりもの じんわりとしみてゆく

おばあちゃんのこころのなかに

ぽこん！と ころがりてた ふわっふわのわんこ

このこも ぷるぷる頭をふり はしりはじめ かけぬける

ここでは 大昔とおくへおもいをとばした どはくりょくの海景の ぱのらまを

(このむこうに なにがあるんかいなあ)

(これ、なんだろうな)

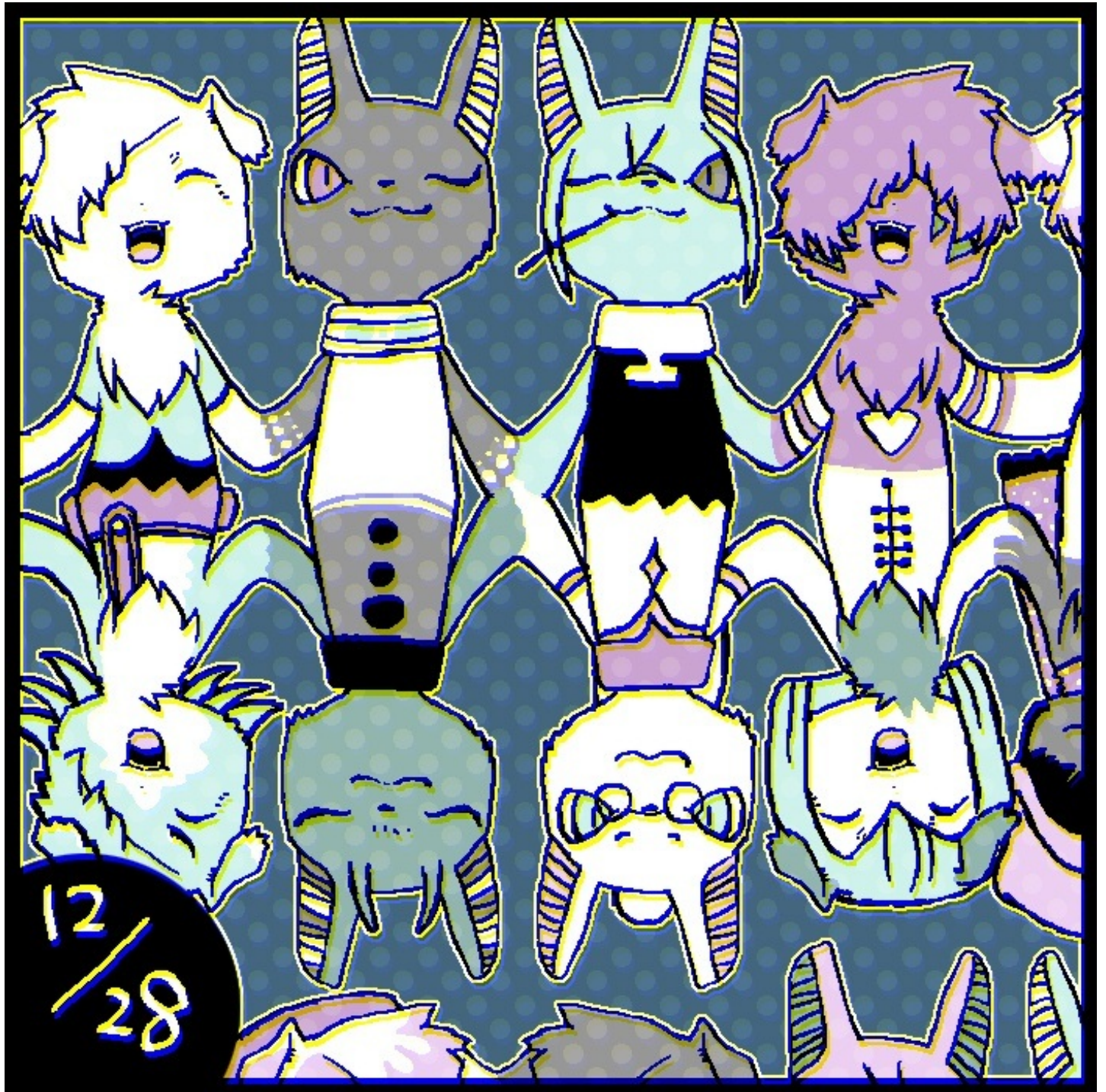
そこから いろんなおはなしが はじまります



犬先生「今日はわが衣装の柄を変えてみたが、どうか？」



ラクシャさん「うん、ヴィエネッタを彷彿とさせるねえ」



空中をきもちよさげに さんぽするもの

なにかきよだいなものを めざめさせているもの

動く植物のうわる農道を あるいていくもの

こまいぬさんのやうに 高い門のりょうはたに すわっているもの



うつろにさまようもの

みな ゆめで かいまみたひとたち いきものず

ひょうひょうと げんきに たんとんと あつく ものがなく のんびりと

ひとときだけの”ほんとう”のなか、にてひな ひでにる いきものたちが  
みたやうな みたことない なにかをしている

めざめてしまえば とおのくもやのむこう

いるかないか いないかいるか  
それより どれより

こころのさいぼうがいつときみせてくれる かれいどすこーぶ ゆーとりあ

そのなかでみた みたことないなにかをしている いろいろが

ぶきような古いじてんしゃをカラカラこぎゆくわたしに

ふしぎのなみを よせてはかえす

きょうもどこかで こころびと どこかはるかを たびする  
たびの かぜを ふかしつつ

きょうもどこかで わたしも だれかも ひびを たびする  
たびの いのちを なぜつつ



犬先生「この度こたつ付自転車を作ったのだが、名はなんとしよう...？」



ラクシャさん「車輪に目玉がっ！」



こころのどこか あるところか あらゆるところか  
そこで 旅の黒犬の若者 ねむりにつた

原生林 苔と月と あやしげで模様のやうな花々と 大鰐の背びれがのっそりと動き出す時間

たれる水音と 音楽を奏でる石と 荒野でなにかを呼ぶ猛禽の声が  
少しずつづれつつ かさなるくうかんに こだまする

こだまする

こだまする ぼふぼふした生き物のこえも

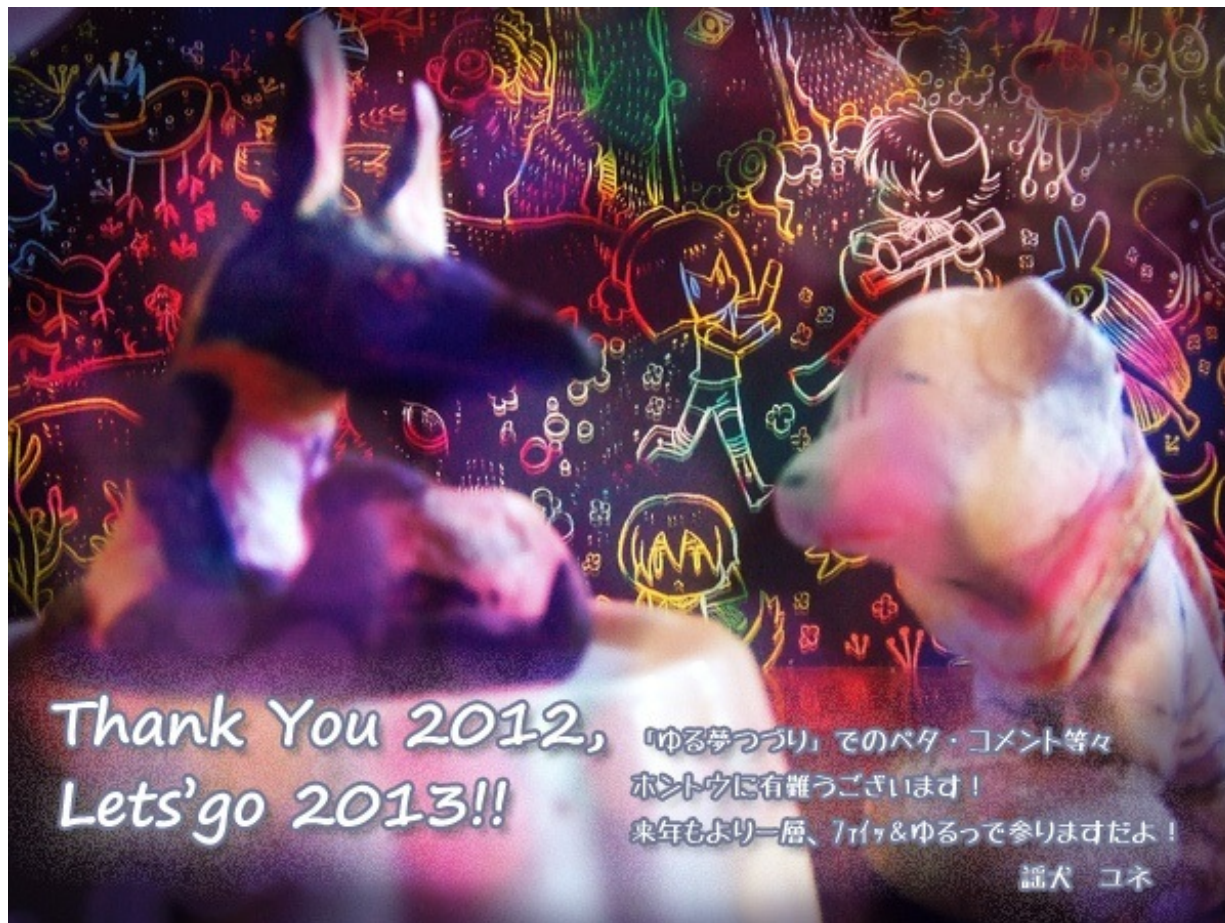


犬先生「おや...そうかもうそんな頃かね  
久しぶりに懐かしい旅をしたものでなあ  
さてはて、私は今 どちら いや、どこの中にいるやら  
巻き尻尾のほうは、どうしたかな？」



ラクシャさん「なんだか僕までこたつにはまってしまった...!  
よし、蔵書リスト作ろうっ」





1 2 がつはコタツ、と何故かゆる夢では なっとりますなあ～

そしてその赤いきれとこたつ布団のかかったなかに、白犬さんと黒犬さんが足温めておるのです。

かれらは、そのままの形じゃなくても、もうずうっと長いこと似た形で見出してきたやうに思っています。

しろくろ+いろいろ対照的な犬さんたちですが、ぱっきり2げんでなく、いろんなところで関わったりとけあったりはじきあったりゆるまったりしています。

そういうこと なのかもしれないなあ～と、なんとなくっ

おやっ 2ひきから ごあいさつがあるやうですぞ！

(↓くりっくで拡大できますだっ)



犬先生「やあやあ諸君、魔窟の掃除は終わったかね。腰にカイロを貼って労わる事忘れぬようにな

ではまたの 1 2 の月に...」



ラクシャさん「こんにちは。おもちはもう搗いたでしょうか？お風邪などめさぬよう、温かくすごしましょうね。

それじゃあ、よいお年を！」

こたついぬず まとめっ

<http://p.booklog.jp/book/71543>

著者：謡犬 ユネ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuneutainu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71543>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71543>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ